

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 66

2012年4月

Special to the Newsletter

日系二世と強制収容所での余暇

野崎 京子

この稿を、香港で書いている。「先生のお父さんのライフストーリーを研究に絡めて書いて下さい」と依頼されて、その切り口を強制収容所生活での趣味にして、書き出した。父は去年3月、亡くなった。その父が大好きだった香港で、本稿を書いているのを、不思議な思いで考えている。

私の父 谷川カストームは、1909年6月1日、アメリカ合衆国カリフォルニア州ワッソンビルで生まれ、昨年3月16日、京都で満101歳9ヶ月で力つきた（「天寿を全うした」という表現より語呂合わせのようなこの言葉が似合うと思う）。最後の3ヶ月を肺炎のため洛北の病院に入院するまで、一人娘の筆者の家から10分程の所に一人で自立した生活を送っていた。

死の5日前に起こった東日本大震災のニュースを病室のテレビで見せた時、私は父の死を予感した。なぜなら、阪神大震災のときに彼が発した「すぐに立ち直るさ、日本人は。華僑も多いから。」と言う言葉に、私は彼の生命力を感じた（言葉どおり、後日神戸市は見事な復活を遂げた）のだったが、3.11震災の時は、何も言わず暗い目をしてテレビの画像を見つめていたのだ。

サン・フランシスコ大地震の直前、1906年祖父紋太郎と祖母ツモはハワイからアメリカ本土へ移住して来た。父は彼らの次男として生まれ、2歳年上の兄一夫 Kazuo とアメリカ生まれらしい日系二世青年時代を過したようだ。当時、彼らを囲む日米間の政治や外交は波乱に満ちたものであったろうに、「極楽とんぼ」と自称するように、最後まで楽天的でポジティブ思考だった。彼が育ったワッソンビルは、父によるとドイツ系、イタリア系、ポルトガル系、日系が平和的に共存していて人種差別などなかったということだ。典型的「All American Boy」の性格もそんな環境の中で培われたのかもしれない。初めて運転したフォードやシボレーに特別の気持ちを持ち、生涯ミート&ポテイトが好物で、後に仕事になったアメリカ映画、特に西部劇が好きだった。

戦後日本へ帰って来てから、アメリカ映画配給という仕事を心底愛した仕事人間だったが、一方老後は、食べることに毎日のテレビでのメジャー・リーグ野球を楽しみにして居た。そのことが、「強制収容所生活での趣味」について書いてみようと思いついた原因だった。

日系人戦時強制収容所での余暇の過ごし方については、各方面の先行研究があるが、一般的な趣味的なものから、職業的というか専門的なものまで多岐にわたっている。（その種類を具体的に上げるとは、この稿ではしない。）

日系二世の父と母は、収容されていた当時30歳と20歳台、兄と私の二人の幼児を持つ普通の若い夫婦であった。収容以前は、父の兄や妹夫婦の家族と各タイチゴ畑を所有して、メキシコ人やフィリピン人を雇って忙しいながら、充実した生活をしていた。又日中の畑仕事の後、父はカリフォルニア

大学の夜間部で勉強していた。故に当然余暇などといった「贅沢」は無く、収容されて初めて仕事以外の趣味を見いだしたことになる。(紅く熟れた収穫期が短いイチゴを夜を徹して摘んだこと、暗い畑で頭に懐中電灯をくり付け一日20時間位働いた時期もあったことを聞くと、確かに「余暇」を持つ余裕はなかったであろうと思う。)

アメリカ生まれながら4歳から19歳まで日本で暮らし、結婚して帰米した母は、金剛流の謡や趣味と実益を兼ねて洋裁(「ドレスメーカーキング」といつていたが)に熱中していた。(2、3歳だった私は付いて行って教室の隅でお絵描きなどをしていたことを覚えている。)

父がトパーズ、ツールレークの戦時転住局キャンプでどんな趣味を持っていたかは覚えが無いが、1945年彼は単身ノース・ダコタ州の司法管轄による敵性外国人収容所ビスマークに10ヶ月抑留された。(拙著『強制収容所とアイデンティティ・シフト』2007)そこから、私と兄に手作りのかなり手の込んだペンシルボックスを送ってきてくれた。各々の箱の上には、素人っぽいながらカラフルな絵が描かれてあり、私のそれには小さな女の子が黒板に“Kyoko Norma”と書いているそばにはスコッチテリアらしい白い子犬がいた。確か兄のは、野球をしている男の子の絵だったとおぼろげに覚えている。表面に光沢があったのは多分ニスがぬらされていたのであろう。(これらの筆箱は残念なことの一つの間にか見当たらなくなり、手元には無い。日本に持って帰って来たこと、その角がなめらかに丸みを帯びて細工されてあったことなどは覚えているのだが。)

ビスマーク司法省抑留所は他の戦時転住局キャンプより食事や設備は良かったようで、筆箱などの一寸した工芸品の他にも、器用な人なら家具なども作れるような大工仕事の施設があり、抑留者の中に専門の職人が居て教えてもらっていたようだ。先述の筆箱は、父が抑留所内の売店で買ったチョコレートと一緒に、ツールレークに居た兄と私に送ってくれたのだった。

又、後年父の仕事となった映画への傾倒も、この当時芽生えたもののようなのだ。(収容以前から、日曜日という、父たち純二世はアメリカ映画を見に行っていたことを母が述懐していた。)抑留所では映画が殆ど毎日上映されていたようで、父は一週間に2日は映画を見たと言っていた。映画のタイトル(『強制収容とアイデンティティシフト』)から推察すると、収容者を刺激しないようにとの配慮か、軽いロマンタッチ・コメディが多かったように思われる。

2007年8月、筆者は抑留所の跡地、現在ネイティブ・アメリカンが主たるユナイテッド・テクニカル・カレッジを訪問した。レンガ作りの建物など、抑留所当時のものを保存しており、敷地そのものが「歴史遺産保存物」となっているが、その中には、映画やコンサートがもたれたシアターも父が言っていたとおりの場所に存在していた。(「公文書の出会いと記憶の再生」『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』2011)

彼の映画と野球への関心をつなげるエピソードがある。それはジョー・ディマジオとマリリン・モンローに日本で会ったことである。朝鮮戦争(1950-1953)で、韓国に駐屯するアメリカ兵慰問でマリリン・モンローが、当時の西鉄ライオンズから招待されたアメリカ野球選手ジョー・ディマジオと新婚旅行を兼ねて来日していたのだ。父はアメリカ映画配給会社の九州(博多)支店長として、彼らの接待にあたり、当時小学生だった私は、花束を持って彼らが宿泊していた博多帝国ホテルの一室で彼らに会った。その時、私は自分のミドルネームとマリリンのそれが同じNormaであることを知り、二人の署名入りの写真ももらった。

日系人たちの強制収容所での余暇活動の中でも、特に野球に関するものは多々ある。ここ数年、日本の野球チームからアメリカのメジャー・リーグへ入団した野球選手たちのニュースが続いている。想像もつかないような破格の高額金で契約された彼らは、まさにアメリカンドリームの典型であろう。入団したばかりの話題のダルビッシュはさておき、在米で活躍中の日本野球選手の中では、12年目に入るイ

チローの姿が目について久しい。そして、彼が所属するマリナーズの本拠地シアトルは、日系人が多数居住し、イチローやその他の日本人野球選手のメジャー・リーグでの活躍を心から応援している。

父の老年の楽しみの一つは、衛星放送による“メジャー・リーグ野球観戦”であったが、亡くなる前の3ヶ月を病院で過ごすまで、自宅のテレビで毎朝その放映を楽しみに見ていた。二重言語放送で英語のコメンテーターのやり取りを聞けることも嬉しかったようだ。

日系人の野球好きは、戦時中の収容所でも盛んであったことに現われているが、拙著『強制収容とアイデンティ・シフト』にもそれを物語る一枚の写真を紹介した。

それはツールレック収容所のリトル・リーグの写真で、年長の男の子たちに混じって当時グループの中で最も年下、8歳の谷川 博、私の兄が写っていた。この写真は、家族の一員としての私的興味だけではなく、強制収容所を研究する者として、意義のある一葉と後年わかった。

それは、この写真が写された1945年、父は私たち家族から遠く離れて、一人内陸のノース・ダコタ州フォート・リンカーン敵性外国人収容所に抑留されていたのである。彼は戦後日本に帰って来たら死ぬまで、その思考や食事をはじめライフスタイルが「典型的アメリカ二世」であった。抑留中、兄のリトル・リーグの練習の為にキャッチボールの相手をしてやれなかったこと、他の家族と違って母がその役割を担っていたことなどを、述懐していた。

楽天的な父が後悔を込めてこのようなことを言うのには、もう一つの理由があった。1945年2月から12月までの10ヶ月をカリフォルニア州とノース・ダコタ州で別々に暮らした私たち家族4人は、その年の年末にポートランド州から出航した引き揚げ船上で、殆ど1年ぶりに再会したのだった。通信も自由で無かった時期、6歳と8歳の二人の子どもを連れて20代後半の母が、内陸地の抑留所から釈放される父と船の上で合流する予定をどんなに不安な気持ちで実行したかと思うと、胸が痛む。更に、追い討ちをかけたように、この引き上げから半年もたたない翌年1946年5月、兄は事故死した。収容所でのリトル・リーグの写真が葬式での遺影となって祭壇に飾られていたことを、今でも思い出す。

写真の下部に“Block 69 10 to 14 years Ball Team August 1, 1945”と手書きされているように、各ブロックにチームが存在していたことがわかるし、「野球」が戦時当局が認めた収容所での余暇の一つとして、人気があったことは収容所新聞などの記事にも記録されている。

2012年3月8日、NHKは「野球にかけた日系人の物語」と題するドキュメンタリーで日系ハワイ移民銭村健一郎のことを報道した。戦争中、強制収容された時、そこに球場を作りリーグを組織して殺伐としたキャンプ生活にささやかな心の支えの場を提供したと高く評価されている。そのケンイチが作った野球場の一つが、フェニックスから南へ約50キロほど離れたところにあったヒラリバー強制収容所内の“ゼニムラ・フィールド”だった。廃材などで作った施設はだんだん本格的になっていったばかりではなく、対外試合も開かれ、ユマ高校の野球部との対戦が収容所の外での試合だったので、銃を手にした軍隊が見守る中でのゲームだったというエピソードも報じられている。

アメリカ政府の抑圧と「強制収容」という理不尽な決定に抗議した父は結局、「アメリカンドリーム」の最たるハリウッド映画に関わる仕事につき、退職後は同じ夢を追い続けるメジャー・リーグ野球を楽しくテレビ観戦したのだった。

この稿を書き上げて香港から帰国してみると、Bank of Americaから小切手が送られて来ていた。父の死後、相続人として著者が預金の閉鎖申請をしたとき、親子関係を示す出生証明書 Birth Certificate と死亡証明書を提出したことが受理されたのだった。生前、父はこの預金から毎年、知人友人にクリスマスプレゼントとして送る See's Candy を大量に注文していたものだった。彼とカリフォルニアの繋がりを象徴するようなこの年中儀式も無くなったことを寂しく思っている。

(京都産業大学名誉教授)

文学の中のアメリカ生活誌 (57)

新井 正一郎

California (カリフォルニア州) カリフォルニア州名は、1510年に出版されたスペイン作家O・モンタルボの小説『エスプランディアン行状記』(*Las Sergas de Esplandián*)に描かれている実在しない島に因む。以下はその一節。「インドの右手に、カリフォルニアと称される地上の楽園にごく近い島がある」。広い大洋の彼方に無限の富を持つ楽園に近い島があるというモンタルボの記述に魅せられ、カリフォルニアに初めて足を踏み入れたヨーロッパ人は、ポルトガル人航海者J・R・カリョである。彼の後にこの新たな大陸を探検したスペイン人探検者F・V・コロナドなども探し求めた黄金を発見できなかった。周知のように、コロンブス以前のアメリカに一つの大帝国を築いたアステカ族は自らを「メヒカ」と称していた。彼等の首都テノチティランを征服し、そこにMexico(ナウワ族の言葉mekihico「メヒ族の町」からのスペイン語Mejicoを経て英語に入ったもの)市を建設したスペインの征服者H・コルテスもモンタルボの話を知っていたようで、カリフォルニア湾まで行っている。スペイン王室はコルテスから、この地が広い豊かな土地と温暖な天候に恵まれているとの報告を受けていたにもかかわらず、なかなか入植の意向を示さなかった。一つの理由はカリフォルニアを島だと思ったことにあった。もう一つの理由は、この地域が本国からも新大陸のスペイン領ヌエバ・エスパーニャ(新スペイン)副王国の中心地メキシコ市からも遠く離れていたからだ。しかし18世紀になると、ロシアの毛皮商人がラッコを求めて太平洋岸を南下してサンフランシスコの北20マイルほどのところに船着場を築いたことが機となり、対抗上、スペインはアルト・カリフォルニア(現在のカリフォルニア州)に継続的な入植活動を試みるようになった。この地方に最初に入ったのは、スペイン国王が派遣した守備隊とそれに同行したカトリックの宣教師たちだ。なかでもこの地域の植民化に大きな役割を果たしたのが、1769年に派遣されてきたフランシスコ会のJ・セラ神父である。彼は4000年ほど前からアメリカ南西部に住みついていたズー族(Zuni)、ホーピ族(Hopi)などのプエブロ・インディアンを文明化するため、サンディゴにミッションと呼ばれる要塞でもあり、伝道所でもあり、農園でもある施設を築き、その後もサンディゴからモンテレイにかけての一带に幾つものミッションを建てた。その7年後、北部メキシコからこの地に入ったフランシスコ会の別の修士達達が、サンフランシスコ湾を見下ろす地にカリフォルニアで6つめの教会を建設した。彼等はこの施設をアッシジの聖フランシスコ(Saint Francis of Assisi)に捧げたため、アッシジの聖フランシスコと呼んだ。そんなわけでサンフランシスコという地名が生まれた。

前に述べたように、カリフォルニアは明るい太陽と豊富な土地に恵まれていたが、奇妙なことにスペイン同様、スペインから独立したメキシコも自負心のためか、怠惰のためかカリフォルニアを積極的に活用しようとしなかった。その結果、1840年代の半ばには、メキシコ政府はこの辺境地方をイギリスに売り渡そうと考えた。が、この地に住んでいた小数のアメリカ人が懸念したイギリス支配下のカリフォルニアという現実、カリフォルニア政権内部の対立のために、実現にいたらなかった。ついでにすると、ニューイングランドの政治家D・ウェブスターも、1842年頃にはアメリカによるカリフォルニアの領有化の必要性を口にしてきた。カリフォルニアへの

強い関心を示した最初の国は前記のロシアであった。1788年、ロシアの毛皮商人が太平洋岸でのラッコ皮貿易の独占事業を展開する会社設立の許可を時のロシアの女帝に願っていたが、1795年に亡くなったために、その企図は婿に引き継がれた。2年後の1797年、婿の連合アメリカ会社は、サンフランシスコまで南下しラッコ捕獲の業務を開いたが、1820年までには、大平洋への窓であるモンテレイとサンフランシスコを含む地域におけるラッコ皮貿易への関心を示していたイギリスと膨張主義運動中のアメリカによって、ロシアの南進の夢は阻まれてしまった。

アメリカのカリフォルニアとの接触は、1790年代、ラッコ漁のニューイングランド商人を乗せた船の訪問ではじまり、1820年代には、その恵まれた気候の中で暮らし、家畜や葡萄から利益をあげたいと希望するアメリカ人入植者が陸路この地に入っていたが、ゴールドラッシュ前の手つかずのカリフォルニアの魅力を一般に知らしめるはたらきをしたものの1つは、ハーヴァード大学の若い学生R・H・ダナの著作『平水夫としての2年間』(*Two Years before the Mast*, 1840)だ。次はそこからの引用。「周囲のあらゆるものに崇高さがあり、それが光景に荘厳さを与えていた。沈黙や寂しさがどの部分にも影響を及ぼしていた。(略)私は他の者と別れ、打ち寄せ、砕ける見事な波の音を生み出す岩に腰をおろし、(略)まったく新しい眺めの楽しみにふけていた」。この文学作品は出版と同時にカリフォルニア行きを切望する冒険好きのアメリカ人を多く生み出した。その結果、カリフォルニアは怠惰なスペイン系住民の社会から悪徳、欲望、活力が渦巻くアングロサクソン系の社会へとその性格を変えていった。この変容をはやめたのが、1848年1月24日、サクラメント・ヴァレーで発見された砂金のニュースである。1848年12月5日、時の大統領ポークが議会への教書でそのことを公式に報告したので、カリフォルニアにはたちまちarogonautsと呼ばれる黄金熱にとりつかれた冒険者が国内各地から、また海外からもどっとやってきた。最初に小村サンフランシスコに姿を見せたのは、1849年2月28日に蒸気船カリフォルニア号できた船員一行である。後に彼等は49年組を意味するフォーティ・ナイナーズ(forty niners)という名で呼ばれた。1849年1月のサンフランシスコには2千人足らずの住民しかいなかった。それがその年の12月には、8万人で賑わう都市に成長していた。押し寄せてきたのは船員、金鉱堀り、実業家だけでなく、金を掘り当てた人々から金をまきあげる賭博師、金貸したちであった。特にこの種の連中が集中していた地区は風紀の悪い所を指す「バーバリー海岸」(the Barbary Coast、1849年に生まれた言葉)と呼ばれた(この名は昔、海賊の基地であった地中海沿岸「バルバリ海岸」から出ている)。ごろつきを指すhoodlumもゴールドラッシュ時に登場した言葉である。またスペイン語El Doradoは16世紀のスペイン人探検者が求めていた伝説の「黄金の都市」を指す言葉であったけれども、1846年にはカリフォルニアのある地方の名に用いられるようになった。この期の鉱山町の情景は、当時の作家B・ハートが書いた『ロアリング・キャンプの幸運』(*The Luck of Roaring Camp*, 1864)によく捉えられている。1849年にはカリフォルニアの外国人人口は、準州になるのに必要な人口数を越え、翌1850年には、31番目の州として合衆国に加入した。

(天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長)

【第16回アメリカス学会年次大会発表要旨】

ネイティブの内側から多民族社会を捉え直す

—ハワイの事例より—

井上 昭洋

2009年、ハワイ州は制定50周年を迎えた。様々な記念イベントが行われる中、50年前に合衆国50番目の州となった8月21日、ホノルルのハワイ・コンベンション・センターで、“New Horizons for the Next 50 Years”と題して記念コンファレンスが開催された。開会の辞で、州知事リンダ・リングルは、多様性こそがハワイの強みであり、ハワイは「多様性のモデル」としてアメリカに貢献することができることを主張した。

ハワイは、先住民のハワイ人に加え、白人系、中国系、日系、ポルトガル系、韓国系、フィリピン系、そしてサモア系を含む太平洋島嶼民など、多くの民族から構成される社会である。それらの民族が一つにまとまった社会として“Rainbow Society”と呼ばれることもある。多様な民族から成る調和の取れた虹色の社会とさえ聞こえは良いが、この多様性と調和は常に微妙な緊張関係にある。事実、2009年8月21日、コンベンション・センターの外では、先住ハワイ人の団体がハワイ州制定50周年に反対する抗議活動を行っていた。

現在最も受け入れられているハワイ人の定義は、「1778年以前にハワイに住んでいた人々、および彼らの子孫」というものだ。1778年とはジェームズ・クックがハワイにやって来た年であり、ハワイ人が初めて西洋人と接触したとされる年である。18世紀の最後の四半世紀、ハワイ人の人口は30万人から40万人と推定されたが、免疫を持たない彼らは、西洋人の持ち込んだ伝染病によりその数を激減させる。彼らの人口は、1820年に宣教師がやって来た時には15万人を切り、1850年には8.2万人、1890年には混血を含めても4万人となり、ハワイの総人口の過半数を割ることになった。

19世紀後半、ハワイ人の人口が減少を続ける一方で、サトウキビ産業の興隆に伴い、中国人、日本人、ポルトガル人が農園労働者として入植する。20世紀に入ると、韓国人、プエルトリコ人、フィリピン人なども移民としてやって来て、ハ

ワイはハワイ人と白人系住民に加えて、それらの移民から構成される多民族社会を形成していった。この社会の多民族化は、一社会集団の民族構成にも見て取ることができる。例えば、当初はハワイ人を改宗対象としていた会衆派教会も、その信徒の構成が徐々に多民族化し、20世紀の前半には幾つかのエスニック教会が誕生した。

19世紀を通して減少していったハワイ人であるが、同世紀後半に入ると混血化が進行し、センサスにおいても純血ハワイ人と混血ハワイ人が個別に算出されるようになる。1854年には、純血ハワイ人70,036人、混血ハワイ人983人であったのが、1890年には、純血ハワイ人34,436人、混血ハワイ人6,186人となり、混血ハワイ人の比率が上昇していった。20世紀に入ると、ハワイ人の混血は、中国人やポルトガル人の移民との間でも進み、さらに複雑なものになっていく。社会の多民族化は、ハワイ人の身体においては混血という形を取って現れた。

ハワイ人の人口は20世紀中頃に向けて徐々に増加し始めるが、これは主に（少なくとも統計上は）混血化によるものと言って良い。なぜなら、国勢調査におけるハワイ人の定義は、1960年までは、いわゆる“one-drop rule”によるもので、少しでもハワイ人の血を引いている者はハワイ人として数えられたからである。しかし、1970年の国勢調査では、自己同定に基づいて自分の人種・民族を申告する形式に変更され、加えて「混血ハワイ人」の選択肢がなくなった。そのため、統計上、この年のハワイ人の人口は減少することになる。

1980年と1990年の国勢調査においても自己同定に基づきハワイ人の人口が算出されたが、同じ年に行われたハワイ州保健局の独自の調査では、いずれも国勢調査局のデータの1.5倍のハワイ人の人口を算出した（2000年の国勢調査では、複数の民族集団を選択可能とする調査形式を取ったため、ハワイ人の人口は州保健局の算出する数値に近づいた）。このように、調査方法が変われば、算出される人口に大きな開きが出るという事実は、エスニック集団としてのハワイ人の誕生を意味している。ハワイ人は、客観

的な指標で同定できると信じられた民族集団から、血統への信念と文化的親近性に基づいて自らが何者であるかを名乗るエスニック集団へと変貌を遂げたのである。

ところで、混血化の進んだ多民族社会においては、「血」の分量に基づいてアイデンティティが構築されることが多い。例えば、ハワイでは「私の中には、白人と中国人とフィリピン人の血が流れている」とか「私は半分がハワイ人で、残りの半分が中国人とポルトガル人だ」といった語りをしばしば耳にする。この「何分の一はハワイ人」という語りは、「血」の分量を重視しているという点で、植民地社会における「血統量定 (Blood Quantum) 法」の言説と地続きであると言える。

血統量定法とは、植民地において先住民を純血と混血に分類し、さらに後者をどれだけ先住民の血を引いているかによって細分化していく慣行である。この慣行に従い、混血によって薄まった先住民の「血」を算定し、それがある割合を下回った時点で、彼らから先住民の資格を剥奪して、彼らを人種のマイノリティに変換する。血統量定法は、植民地における先住民の同化政策を支える強力なツールとして働いたのである。

ハワイにおいては、1921年に成立した「ハワイ人宅地委員会法 (the Hawaiian Homes Commission Acts)」が、血統量定法に基づいて「先住ハワイ人」を定義づけた。それは、現在に至るまで、制度の上だけでなく、ハワイ人のアイデンティティに対しても影響を及ぼし続けている。この法律は、1898年のハワイ併合時に合衆国に割譲された約20万エーカーの土地をハワイ人宅地委員会の管理下に置き、50%以上のハワイ人の血を引く“native Hawaiian” (小文字の“n”の先住ハワイ人) に自作農地として供給することを目的としていた。しかし、当初目指したハワイ人の“更正”に実効がなかったばかりか、50%のラインを引いて先住権のあるハワイ人と先住権のないハワイ人とに差異化するという悪影響を残すことになった。

既に述べたように、19世紀中頃に始まるハワイ人の混血化は20世紀に入って複雑さを増して

いったが、彼らの混血性を指し示す用語は時代と共に変化してきた。すなわち、最初に誕生した混血ハワイ人は、Hapa Haole (ハワイ語で「半分白人」の意味) または Part Native と呼ばれる白人との混血であった。ところが、19世紀末には、彼らに対して植民地社会に特有の呼称である Half-Caste が用いられ、続いてそれは Part-Hawaiian という表記に変更された。

20世紀に入るとセンサスにおいて混血ハワイ人の細分化がなされ、1910年から1930年にかけては、Hapa Haole には Caucasian Hawaiian、アジア系の混血ハワイ人には Asiatic Hawaiian という表記が用いられた。しかし、混血の複雑化が進行すると再び混血ハワイ人の呼称は Part-Hawaiian に統一され、1970年代以降のセンサスでは混血ハワイ人のカテゴリー自体が消失する。今日、ハワイ人の呼称は、Hawaiian に加えて、Native Hawaiian (大文字の“N”の先住ハワイ人)、ハワイ語で先住ハワイ人を意味する Kanaka Maoli、Kanaka ʻŌiwi といった表記が用いられている。

文化接触時の「ネイティブ (ハワイ人)」と「外来者 (白人)」の出会いからスタートしたハワイ人の身体と文化の混血・混濁化は、多様な移民の流入により複雑になった。ハワイ人の身体について見れば、混血化の初期の段階では、センサスに限らず日常レベルの認識においても、混血ハワイ人のカテゴリーは細分化される傾向があった。しかし、混血が複雑化すると細分化は放棄され、混血ハワイ人のカテゴリー自体もセンサスから無くなった。混血概念そのものが射程外に置かれる状況が生まれたと言える。

そのような状況下、血統量定を想起させる「混血性」よりも、祖先との繋がり (genealogy) を強調する「先住性」がハワイ人にとってより重要となり、純血性も混血の度合いも問われない新たな無標の「ハワイ人」が誕生する。こうして「ネイティブ」対「外来者」という文化接触時の二分法が異なる意味をもって再登場し、混血性の称揚よりも真正な先住性という自己表象が突出するのである。これもまた、多民族社会ハワイの現実である。

(天理大学国際学部准教授)

【第16回アメリカス学会年次大会発表要旨】

在日ブラジル人におけるプロテスタントの伸展 —ブラジルの宗教変容の文脈において—

山田 政信

1. はじめに

人・物・金・情報の国境を超える容易い移動を促すグローバリゼーションが我々の生活世界で実感されるようになって久しい。人の移動に着目すれば、日本では1980年代初めにアジアから、その後はラテンアメリカから正規、あるいは非正規に就労を目的に来日する人が増加している。本稿は1990年以降来日者が急増したブラジルの人々に着目し、彼らの宗教生活について考える。

2. 社会現象としてのデカセギ

ラテンアメリカは、1980年代にかつてないほどの深刻な経済危機に見舞われた。この地域では1970年代に輸入代替工業化を進めるために多額の債務を抱え、金利高騰が引き金となって1982年メキシコに端を発する金融危機が起こった。それ以降、ブラジルやアルゼンチンでも債務不履行に追い込まれ、ハイパーインフレと失業率の上昇で民衆の生活は極めて厳しくなった。景気は停滞し、その後「失われた10年」と呼ばれる時期を体験する。一方、同時期の日本ではバブル景気を迎える中、若者の間で高学歴化が進み、単純労働がいわゆる「3K」として敬遠されるようになった。かくして深刻な労働者不足に悩まされる日本の労働市場に、1980年代後半以降、仕事を求めるラテンアメリカの人々が入ってくることになった。1990年6月には出入国管理及び難民認定法（入管法）が改正され、日系人ならば3世まで就労が可能になった。これ以降、推定人口150万超とされる日系人を擁するブラジルをはじめ、ペルーやボリビアから、家族あるいは単身で来日する人が増加した。2005年に在日ブラジル人人口は30万人を超え、2008年のリーマンショックで大量の人々が帰国を余儀なくされたとはいえ、2010年現在約23万人を数えている。

ブラジルでもデカセギ(Decasségui)は社会現象の一つとして認識されるに至り、ポルトガル語の新語として辞書にも載せられるようになった。

この現象に関して様々な分野で研究が進められてきているが、彼らの宗教生活に関する実態調査や掘り下げた議論はそれほど多くないといえる。

3. ブラジル人コミュニティにみるブラジルの宗教変容

ブラジル人の宗教はカトリックだというイメージがあるだろう。ところが、日本のブラジル人コミュニティで彼らの宗教行動を精査すると、プロテスタント信者がカトリック信者と同等かそれ以上にアクティブに活動していることに気づかされる。それを理解するための指標の一つとしてデカセギで来日したブラジル人自らがプロテスタント教会（以下、ブラジル系プロテスタント教会）を設立させているという事実を挙げることができる。教会の多くは、布教専従者として教団から派遣された聖職者によってというよりも、デカセギとして来日した信徒・改宗者が自らのイニシアティブで設立している場合が多い。ブラジル人が集住する東海や関東では1993年ごろからブラジル人によるブラジル人のためのレストランやレンタルビデオ店などのエスニック・ビジネスが誕生しているが、ブラジル系プロテスタント教会の多くもその頃創設されるようになっていく。ブラジル系プロテスタント教会の誕生はエスニック・コミュニティの成熟度を物語ると同時に、実は本国の宗教変容の姿を反映している。

ここでいう宗教変容とは、国民のカトリック離れとプロテスタンティズムの増加である。ブラジル地理統計院の1980年調査では概算で国民の90%がカトリック教徒だった。しかし、その後数値は減少し、2000年調査では74%になった。この中には名目上の信者が多数含まれ、「熱心な」信者はおそらく20%ぐらいだろうと思われる。一方、同時期のプロテスタント信者は7%から15%に増えている。プロテスタント信者を表明する者は、アクティブな信者を自認する傾向が強い。とすれば大雑把な理解だが、ブラジルでは新旧二つの勢力が接近しつつあるといえる。このようなプロテスタント教会の伸展を促している

のはペンテコスタリズムである。筆者は既にその背景について論じているので詳しくはそちらをご覧ください（「ネオペンテコスタリズムと救済—現代ブラジルのプロテスタンティズム—」『The Americas Today』第35号）、在日ブラジル人の宗教生活は、まさにそうしたブラジルの宗教変容を映し出しているのである。

4. デカセギの宗教活動

ここで筆者が2008年4月に三重県内を対象にした実態調査の結果をみておきたい。同県には10か所のカトリック教会があり、そのうち7か所でポルトガル語のミサが開かれていた。一方、ブラジル系プロテスタント教会は11か所だった。教会によって規模は異なるが、活動しているとみられる信者総数をそれぞれカトリック教会とブラジル系プロテスタント教会で概算すると前者が500人から600人だったのに対して後者は700人から800人だった。カトリックの場合、毎週日曜日にポルトガル語のミサを行っている教会は1か所で、その他は月に一度程度である。ペルー人とブラジル人の2人の神父が教会を巡回しているため、物理的に開催できる日程が限られるのである。それに対し、ブラジル系プロテスタント教会では毎週少なくとも2回の集會が行われていた。もちろん使用言語はポルトガル語で、牧師はデカセギとして来日した人がほとんどである。これらの観察結果から、デカセギの宗教活動においてプロテスタント教会の占める位置が看過できないことが理解できるだろう。

ブラジル系プロテスタント教会は組織化のあり方で三つのタイプに分けることができる。①デカセギが宗教的必要性を満たすために独自に組織化した教団、②ブラジルに教団本部を持ち、日本で経済的に自立している教団、③多国籍宗教として日本に拠点を置くブラジルの教団。いうまでもなく、それらの所在地はデカセギが集住する関東甲信（群馬、茨城、東京、神奈川、長野）、東海（静岡、愛知、三重）、関西（滋賀）、中国（広島）である。統計が存在しないために教会の実数を明らかにすることはできないが、一時期は400か所ほどになったともいわれる。リーマンショッ

ク以降は牧師や信者の帰国によって閉鎖された教会も少なくない。

教会のタイプでは①が最も多いとみられる。このタイプは、日本人の教会の集會に参加していた人々がグループで独立したり、アパートの一室で開いていた集會の規模が大きくなったものである。使用される建物は、商店街の空き店舗、貸事務所、元銀行や工場跡、さらには廃業したパチンコ店などである。内装を綺麗に改装し、説教台が置かれる舞台が造られ、信者のための椅子が並べられる。集會では、エレキギターやドラムを用いて賑やかな讃美歌が演奏されるため、音響設備とプロジェクターもしつらえられている。日本では宗教建造物といえば荘厳なイメージがあるため、ブラジル系プロテスタント教会の建物の様相に違和感を覚える日本人は多いだろう。しかし、ブラジルでは映画館や銀行が空き店舗になると日を経ないうちにプロテスタント教会に早変わりするという現実がある。日本における彼らの宗教実践はブラジルの再現に他ならない。

5. おわりに

デカセギが生み出すプロテスタント教会は、広田康生がいうところのエスニック・ネットワークの「繋留点」の一つに見なしうる。そこは、①就業機会や情報の獲得、②生活問題の相互扶助や処理、③福祉や生活の楽しみ、が実践される場である。教会によっては、失業したブラジル人のために食料や生活必需品を収集・配布したり、日本人のホームレスを教会敷地内で世話するところさえある。彼らは同胞の支援のみならず、日本社会そのものに「神の栄光」を伝えようとしているのである。それにより、彼らは自己肯定感や威信を獲得することができる。ブラジル系プロテスタント教会は、デカセギの日本社会への適応ストラテジーの一つであり、日本社会への共感的参与の場でもある。しかし、そこに我々は、社会を救済するという彼らの情熱が彼ら自身の救済につながっているという宗教的意味を見出すことができるのである。

（天理大学国際学部准教授）

3コースの最優秀卒業論文に

「酒本真理子賞」を授与

天理大学アメリカス学会では、去る3月22日の卒業式当日に恒例の「酒本真理子賞」をヨーロッパ・アメリカ学科の英米語、イスパニア語、ブラジルポルトガル語の各コースにおいて選出された最優秀論文執筆者に授与した。授与式は、卒業式典直後に開かれた、上記3コースの各コース教員・卒業生が参列したクラス会の席上挙行され、以下の受賞者3人にそれぞれ賞状と図書カード2万円分の副賞が手渡された。

この「酒本真理子賞」は、1990年3月に旧外国語学部英米学科を卒業し、1年後に志し半ばにして白血病で亡くなった酒本真理子さんの名前を冠して創設された賞である。彼女の父親の酒本昌彦氏から、「後輩の育成とアメリカス学会の出版活動に役立っていただきたい」と毎年寄付を頂戴しているが、その一部を「酒本真理子賞」として毎年卒業式当日授与している。

英米語コース：雪岡 理道

“Studies in Mysticism: Theory Established by Evelyn Underhill and Her View of the Body” [英語論文] (「神秘主義の研究－イヴリン・アンダーヒルの理論と身体観－)

イスパニア語コース：鈴木 生喜

「コスタリカの中立宣言－非軍事国家日本を目指して－」

ブラジルポルトガル語コース：山下 和哉

「ファヴェーラにおける犯罪組織綿討作戦－“ゼロ・トレランス”の視点から－」

アメリカス学会新会員紹介

井上周道氏 (2012年2月入会) 中西康裕氏 (2012年2月入会) 二瓶マリ子氏 (2012年4月入会)

アメリカス学会の活動

◇第16回年次大会開催

第16回天理大学アメリカス学会年次大会は、昨年12月3日に天理大学研究棟第1会議室で開催され、記念講演に敬愛大学教授の村川庸子先生をお招きし、「日本人のアメリカ移民の歴史を読み替える－immigration bureaucracy との関連で－」

というタイトルでご講演いただいた。特に、日系アメリカ人強制収容に関する新しい視点について村川先生は、ご自身で収集された最新の資料を駆使しながら熱弁を奮われた。また当日は、井上昭洋・天理大学地域文化研究センター准教授と山田政信・天理大学地域文化学科准教授がそれぞれ研究発表を行った。2人の研究発表の要旨は、本ニューズレターの6～9ページに掲載した。

◇単行本第5弾を発行

昨年12月3日開催された第16回天理大学アメリカス学会年次大会の開催を記念して、アメリカス学会では単行本第5弾となる『アメリカス世界のなかのメキシコ』(『アメリカス研究』第16号)を発刊し、当日出席した会員全員に配布した。また12月末には他の会員、特別会員、全国の大学や研究機関にも送付した。

◇定例研究会を7月14日に開催予定

天理大学アメリカス学会の2012年度定例研究会は、7月14日(土)午後2時から天理大学研究棟3階の第2会議室にて開催する。研究発表者は後日発表の予定。

年会費納入のお願い

☆天理大学アメリカス学会の2012年会計年度は、昨年12月3日に開催された年次大会当日にスタートしました。2012年度の年会費(一般会員:5,000円)を未納の会員の皆様は、昨年12月にお届けした『アメリカス研究』第16号に同封しました郵便振込取扱票にて指定口座(下記参照)宛にお振り込みくださいますよう、よろしくお願い致します。郵便振込取扱票を紛失された方は、下記の郵便振込口座番号宛てにお願いします。

口座番号：00900-5-70364

加入者名：天理大学アメリカス学会

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 66 : 2012年4月24日発行)

発行者：片倉 充造

〒632-8510 天理市杣之内町1050

天理大学国際学部外国語学科英米語専攻内

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/